

2020 年度草木染塾 第 1 回

F I T の皆様、6 月 17 日、本年度最初の草木染塾が開催されましたので報告します。

【タイトル（開催日）】2020 年度第 1 回草木染塾（2020 年 6 月 17 日）

【場所】川崎市黒川青少年野外活動センター

【実施概要】草木染の基本講義とヒメジョオン（姫女苑）を染液として木綿のバンダナとレーヨンのストールをアルミ媒染と鉄媒染で染めた。

【スタッフ】講師：奥村具子、助講師：中野修平、矢吹佳枝

【受講者】古谷一祐、横井行男、林公康

【報告者】林公康

【本文】

コロナウィルス感染の拡大で当初予定されていた 4 月、5 月の草木染塾は中止となり、待ちに待った開催であった。

午前中前半は草木染の基本の講義。かつては世界のどこでも草木や鉱物などで衣服を染めていた。しかし、19 世紀化学染料が使われるようになり自然染料は消えて行ってしまった。

日本人は四季の変化に敏感で、自然の草花などの名前が付けられた色名が非常に多い。平安時代の十二単はまさに色のクラデーションでこの色の妙を争ったとの事。

明治に廃れてしまった草木染を山崎斌氏が復活し、その子青樹氏、孫の和樹氏が草木染を広めた。

草木染の実際について、草木染の原料となる植物は身の周りにいっぱいあること。色を固定するため媒染材を使用。主にアルミ媒染と鉄媒染を使用する。染色する繊維は木綿や麻などの植物繊維、絹やウールなどの動物性繊維、レーヨンなどの化学繊維などである。

午前後半から実際の草木染の作業に入った。姫女苑を細かく剪定鋏で刻み、50g に対して 1 リットルの水を加えて沸騰後 20 分弱火で煮だし、ろ過して染液を作成した。

草木染サンプル用にウール、絹、木綿と濃染剤処理した木綿の 4 種類を染液に 10 分浸け、水洗いして媒染液に 20 分浸けた。水洗いして再度染液に 10 分浸け、水洗いして干した。アルミ媒染では赤みの黄～明るい黄、鉄媒染では茶色、アルミ媒染と鉄媒染の重ね染ではオリーブグリーンになった。

午後からは、濃染剤処理した木綿のバンダナとレーヨンのストールを各自工夫して染色した。木綿のバンダナには輪ゴムで絞ることで、その大きさや数で様々な模様が出来た。ストールはアルミ媒染、鉄媒染、その両方の重ね染など変化を付けて染めた。作品をロープに吊るして鑑賞したが、各自独創的な作品に仕上がっていた。

草木染は身近にある様々な植物で染めることが出来ること、また化学染料と違って微妙な色合いも実際に染めてみた時の楽しみであることを実感できた。これからの講座が楽しみである。



ヒメジョオンを寸胴で煮だす



作品を染液に浸ける



煮だした染液



出来上がった作品



草木染サンプル、右からアルミ、鉄、アルミ・鉄媒染



輪ゴムで絞り模様付けの準備